

点描ぐんま経済

日銀支店長
見聞録

■101■

4月に日銀前橋支店長に着任した。群馬の良い所をたくさん発見したいと思う。

着任記者会見で「県内でまず訪れたいところはどこか」との質問に、迷わず「富岡製糸場」と答えた。日本の近代産業勃興の象徴だが、今まで訪れる機会が無かったのだ。明治時代の殖産興業とそれを支えた資金調達の姿は、金融マンとして大いにロマンを感じる。

記者会見にうそがあつてはいけないので、早速富岡製糸場を訪ねた。午前9時の開場と同時に入場ツアーに

富岡製糸場を訪問

復元エンジンに感激

参加。ガイドさんの説明がうまい。当時欧州で蚕の伝染病が流行したため、日本産生糸への需要が高まったとい

うグローバルな背景や、和洋折衷の木骨れんが造り、広い作業場を確保するためのトラス構造、工女の勤務制度など、当時の最新技術の導入を支えた人々の挑戦や、製糸場で習得したノウハウを全国各地へ広めた工女たちの姿に思いをはせ、胸が熱くなった。その中で、最も素晴

らしいと感じたのは、

展示室の壁には、運行規則である「蒸気機并蒸気鐘取扱規則」も展示されている。17条からなる規則の第1条「常二耳ヲ澄シ機動不

復元したブリュナエンジンの動態展示だ。実際に動く蒸気機関を間近に見るのは初めてである。機械好きの私は、滑らかに動くシリンドーやフライホイール、回転数調整の仕掛けなど飽きることなく見続けた。展示室を離れて

「常二耳ヲ澄シ機動不無キヤ否ヲ聴可シ」を読んで、また胸が熱くなつてしまった。エンジンの調子は目で見てきた。展示室を離れて

は戻り、結局三回見学した。エンジンは動いてこそエンジンである。設計図の残っていないエンジンを復元した富岡市内38社の「富岡スピリッツ」に感激

るものではなく、耳で聴くもの。150年前の技術者のノウハウは今でも確かに生きている。調査の結果は次回のコラムで紹介したい。

製糸場を出たのは12時半。内容、展示方法、

肥後秀明(ひご・ひであき) 1969年生まれ。茨城県出身。東京大経済学部卒。92年に日本銀行入行後、金融機構局審査企画課長兼上席審査役、金融機構局審査運営課長兼上席審査役などを



肥後秀明(ひご・ひであき) 1969年生まれ。茨城県出身。東京大経済学部卒。92年に日本銀行入行後、金融機構局審査企画課長兼上席審査役、金融機構局審査運営課長兼上席審査役などを

を経て2022年4月から現職。